

令和3年度

獨協医科大学教育セミナー



主催： 獨協医科大学SDセンター

令和3年度獨協医科大学教育セミナー開催のご挨拶

獨協医科大学 SD センター長 種 市 洋

本学では、社会環境の変化に対応すると共に大学に対する社会貢献への期待に応えるために、教員だけでなく全学的な職員の資質向上が必要であると考え、恒常的な大学職員のスキル向上に向けた取組みとして平成26年8月1日にSDセンターを設置しました。

医科大学である本学では、教育・研究以外に、地域社会に対して診療という大きな責任を担っております。そのため、本学独自のSD(staff development)として、資格管理部門・教員研修部門・職員研修部門・看護教育部門の4部門を構成し、多角的に教職員の資質向上を目指しています。

SDセンターは『「社会のために」教育・健康・研究に関する課題に対して、主体的に分析し改善を図る事ができる人材を育成します』をmissionに、①医療教育に関する役割遂行能力を向上させる、②自ら資質向上を図り行動できる人材を育成する、③相互成長（共育）を目指す教職員の人材育成を図る、の3つをvisionに掲げ、大学全体としての研修を通し教職員の質の向上を目指しています。本学は、医学部・看護学部・附属看護専門学校・附属看護専門学校三郷校の教学関連部門と大学病院・埼玉医療センター・日光医療センターの病院部門から組織されていますが、各部署（部門）がその組織の垣根を超え本学の建学の精神や病院理念、経営に関して横断的に管理・運営を図り、相互に発展させることが必須です。また、3病院の運営では経営が重要な課題であるため、教職員教育に関する研修が必要であり、これが職員一人ひとりの努力と組織間の協調と協力により本学全体での取り組みと改善に繋がることとなります。

今回で第9回目となる獨協医科大学教育セミナーは、看護教育部門（旧看護教育センター）が平成25年度に看護系職員を対象に開催したのを端緒に、平成26年度からはその対象を全教職員に広げ、職員研修部門が担当し発展的拡大を図り開催しています。

今回のプログラムでは、「withコロナの時代への挑戦」がテーマであり、まさしくタイムリーな内容の演題が寄せられました。獨協医科大学教育セミナーが本学の理念と経営への共通認識への一助となるものと確信しています。来年は記念すべき10回目の開催となります。更に多くの教職員のご参加を期待しております。

最後にこのセミナー開催にあたり携わった教職員の方々に感謝申し上げます。

オンデマンド

- ・テーマ：with コロナの時代への挑戦
- ・公開開始日：令和4年3月1日（火）から（予定）
- ・公開ページ：獨協医科大学リポジトリ（下記 URL or 右記二次元コード）
<https://dmu.repo.nii.ac.jp/>
- ・備考：各演題、10分程度の動画（MP4形式）となります。
PC、スマートフォン、タブレットからご視聴いただけます。
（※視聴には、D-DOA アカウントでのログインが必要です。）



【学長挨拶】

挨拶／教職員へのメッセージ

吉田 謙一郎（獨協医科大学学長）

【一般演題 口演】

- ー1 新型コロナウイルス禍における看護専門学生へのメンタルヘルス・ケア
○野口 幸子、阿部 洋子
獨協医科大学附属看護専門学校
- ー2 コロナ禍における教育の質転換を目指して（※）
○萩原 旬子、佐山 美加
獨協医科大学附属看護専門学校
- ー3 コロナ禍の影響下で臨床検査センターが取り組んだこと（※）
○屋代 いづみ 1)、堀内 裕次 1)、新保 敬 1)、池田 眞由美 1)、田中 光昭 1)
小飼 貴彦 2)、菱沼 昭 2)
1) 獨協医科大学病院臨床検査センター
2) 獨協医科大学 感染制御・臨床検査医学
- ー4 エックス線撮影室における混雑緩和に向けた取り組み
～「撮影開始時刻変更」の効果～
○近藤 綾香、木村 友昭、鈴木 一史、橋本 富寿、浅野 浩一、小黑 清
獨協医科大学病院放射線部
- ー5 電話診療時の処方への対応
○本田 雅巳 1)、上武真佐恵 1)、高橋勇貴 2)
1) 獨協医科大学病院薬剤部
2) 獨協医科大学病院 地域連携・患者サポートセンター医療連携部門兼 総合がん
診療センターがんゲノム診療支援室

〇ー6 当院における植込み型補助人工心臓装着患者のドライブライン貫通部管理方法の検討

○大島 小緒里、渡邊 雅弘、亀山 友理子、菅沼 良恵、水沼 由美子、青柳 恵子
獨協医科大学病院看護部

〇ー7 A 大学病院外来看護師の新型コロナウイルス感染症に関する問診とアセスメントの現状 (※)

○田口 ひろみ、高田 邦子
獨協医科大学病院看護部

〇ー8 A 大学病院の救命救急センターに勤務する看護師のエンゼルケアの実施状況と大切にしていること、悲嘆する家族に対する思いと関り

○横塚 美紀、中田 哲也、神馬 千登勢
獨協医科大学病院看護部

〇ー9 院内の混雑解消に向けた取り組み (※)

○海老原 充生
獨協医科大学病院医事保険課

※) シンポジウム採択演題

シンポジウム

- ・テーマ：with コロナの時代への挑戦
- ・日時：令和4年2月9日（水） 17：00～18：15（予定）
- ・会場：教育医療棟 7F シミュレーション講義室2

時間	内容
17：00～17：10	開会式
17：10～18：10	シンポジウム
18：10	閉会式

【総合司会】 齋藤 裕

【学長挨拶】 (令和4年2月9日 17：00～17：05)

- ・挨拶／教職員へのメッセージ

獨協医科大学学長 吉田 謙一郎

【開会挨拶】 (令和4年2月9日 17：05～17：10)

- ・開会挨拶

獨協医科大学SDセンター センター長 種市 洋

【シンポジウム】 (令和4年2月9日 17：10～18：10)

座長：山口 重樹 (獨協医科大学麻酔科学)

SY-1 コロナ禍における教育の質転換を目指して

- 萩原 旬子 (獨協医科大学附属看護専門学校)

SY-2 コロナ禍の影響下で臨床検査センターが取り組んだこと

- 屋代 いづみ (獨協医科大学病院臨床検査センター)

SY-3 大学病院外来看護師の新型コロナウイルス感染症に関する問診とアセスメントの現状

- 高田 邦子 (獨協医科大学病院看護部)

SY-4 院内の混雑解消に向けた取り組み

- 車田 みゆき (獨協医科大学病院医事保険課)

【閉会挨拶】 (令和4年2月9日 18：10～18：15)

閉会挨拶

獨協医科大学SDセンター 職員研修部門長 関口 徹

シンポジウムは、新型コロナウイルスの感染拡大状況に鑑みて、無観客で実施します。後日、シンポジウムの内容をオンデマンド配信いたします。

0-1

新型コロナウイルス禍における看護専門学校へのメンタルヘルス・ケア

○野口 幸子、阿部 洋子

獨協医科大学附属看護専門学校

コロナ禍にあり、収束が見えず、国民全体が、感染拡大予防のために自粛生活を強いられておりストレスが大きいことは周知の事実である。本校は、医療施設内に学校があること、看護学生として必要な知識・技術を身につけるための講義・演習・実習があり、自粛生活が強く望まれる。そのため、ストレスも大きいと考えられ、メンタルヘルス・ケアが必要となる。委員会では、学生の身体的・心理的な状態を理解したメンタルヘルス・ケアが必要であると考えた。そこで、本校のメンタルヘルス・ケアの現状を教員が日頃実践しているケアと『学生生活アンケート』の結果を踏まえて、課題と今後の解決策について検討したので報告する。

*キーワード：コロナ禍・看護学生・メンタルヘルス・ケア

0-2

コロナ禍における教育の質転換を目指して

○萩原 旬子、佐山 美加

獨協医科大学附属看護専門学校

2020年から始まったコロナ禍において「オンライン授業」を行うにあたり、教育の質を担保するための取り組みを行った。その結果、オンライン授業でも、アクティブラーニングは可能であること。また、オンライン授業と対面授業の教育効果を考えて組み合わせたハイブリッド型授業は、効果的な教育手法であること。ハイブリッド型授業に、アクティブラーニングを取り入れ、反転授業を全面的に導入することで、主体的学修姿勢が養われることが分かった。

今後の課題として、教員間の ICT スキルの向上、反転授業における事前学習としてのオンデマンド型授業動画作成、ICT 技術を駆使した演習や実習における看護援助の複雑なプロセスについてどのように教えていくのかを検討していく。

*キーワード：コロナ禍 ハイブリッド型授業
アクティブラーニング 反転授業

0-3

コロナ禍の影響下で臨床検査センターが取り組んだこと

○屋代 いづみ¹⁾、堀内 裕次¹⁾、新保 敬¹⁾、
池田 真由美¹⁾、田中 光昭¹⁾、
小飼 貴彦²⁾、菱沼 昭²⁾

- 1) 獨協医科大学病院臨床検査センター
- 2) 獨協医科大学 感染制御・臨床検査医学

臨床検査センターでは、2020年3月頃から感染拡大したコロナ禍の影響により検体検査における大規模な分析装置と関連システムの更新計画、臨床検査室の国際標準規格であるISO 15189認定継続と新規申請となる病理検査の対応など、重要な計画が停滞することになった。また、病院内の安全対策として要望されたSARS-CoV-2関連PCR検査の大量処理と適時結果報告を行う運用構築や外来採血・採尿利用者の混雑緩和対策対応が短期間に集中したため、すべてを達成することが困難な状況であった。

ここでは、病院の協力を得ながら職員が臨機応変に対処し、概ね達成した内容の中からISOの取り組みを中心に報告する。

0-4

エックス線撮影室における混雑緩和に向けた取り組み

～「撮影開始時刻変更」の効果～

○近藤 綾香、木村 友昭、鈴木 一史、
橋本 富寿、浅野 浩一、小黒 清

獨協医科大学病院放射線部

COVID-19が流行している状況の中、獨協医科大学病院エックス線撮影室の中待合室において患者が椅子に座り切れないほど混雑していることが問題となっていた。そこで今回、エックス線撮影室中待合室の混雑を緩和することを目的とし、時差勤務を利用しエックス線撮影の一部検査室において検査開始時刻を20分間早める取り組みを行った。その結果、超過勤務時間を増加することなく従来の検査開始時刻における待合室の混雑を約70%低減することができた。この取り組みにより、中待合室の混雑が緩和し、また、外来診療開始時に撮影画像を提供できるようになり、感染対策と共に患者サービスが向上するという成果が得られた。

0-5

電話診療時の処方への対応

○本田 雅巳¹⁾、上武真佐恵¹⁾、高橋勇貴²⁾

1) 獨協医科大学病院薬剤部

2) 獨協医科大学病院

地域連携・患者サポートセンター医療連携部門
兼 総合がん診療センターがんゲノム診療支援室

2019年12月に武漢市で発生した新型コロナウイルスは、2020年1月16日には日本国内初の感染者が報告された。3月1日厚生労働省はそれまでの集団感染事例から、「3つの密」を避けるよう勧告した。その後、3月13日「改正新型インフルエンザ等対策特別措置法（新型コロナウイルス特措法）」が成立した。こうした中、すでに2月28日には「新型コロナウイルス感染症患者の増加に際しての電話や情報通信機器を用いた診療や処方箋の取扱いについて」が発出され、対応の留意点がまとめられた。これを受けて当院でも、3月13日には電話診療による投薬を開始したので、その過程と現在までの状況を報告する。

0-6

当院における植込み型補助人工心臓装着患者のドライブレイン貫通部管理方法の検討

○大島 小緒里、渡邊 雅弘、亀山 友理子、菅沼 良恵、水沼 由美子、青柳 恵子

獨協医科大学病院看護部

植込み型補助人工心臓のドライブレイン（以下DL）を側腹部から貫通させる場合、ドライブレイン皮膚貫通部感染症（以下DLI）のリスクが高い。DLを側腹部から貫通させた症例の管理方法の妥当性を検討した。

対象はDLを側腹部から貫通させた患者7名で、DL貫通部の管理方法や看護師の関わりについて電子カルテより情報収集し分析した。2016年以降はシャワー浴や微温湯による洗浄を中止しヘキシジンでの消毒のみへ変更した。その結果、3例の患者ではDLIの発症はない。

処置方法の変更後5年経過しDLIの発症がないことから、現行の管理方法が妥当であることが示唆された。退院後、コアナースが外来受診時にDL貫通部の状況や手技などを確認し対応することで、患者が自己管理を継続でき、DLIの予防に繋がった。

0-7

A 大学病院外来看護師の新型コロナウイルス感染症に関する問診とアセスメントの現状

○田口 ひろみ、高田 邦子

獨協医科大学病院看護部

【目的】外来看護師が、感染問診票や問診を通じて情報収集とその情報を整理し、どのようにアセスメントしているのか現状を明らかにする。

【方法】2021年10月4日から2021年10月15日にA大学病院に所属し、外来に配属されている看護師85名に新型コロナウイルス感染症に関する問診票とアセスメントの現状を感染問診票に関する14項目、問診に関する13項目、看護記録に関する9項目にアンケート調査を実施し分析した。

【結果】感染問診票を用いた情報の確認、感染問診票回収後の問診、問診に関する看護記録について、実際にとっている行動と思いを比較した結果、過半数の項目で有意差を認めた。また、内科系診療科と外科系診療科で比較した結果、問診に関する項目で有意差を認めた。

【結論】1. 外来看護師は、限られた時間で効果的な感染防止策を実施するため多職種での情報共有と連携を実施している。2. アセスメントは、感染問診票から問診を行い現状判断し、感染予防策に繋げている。また、記録についての教育や記録の効率化により、アセスメントが明文化できる。

0-8

A 大学病院の救命救急センターに勤務する看護師のエンゼルケアの実施状況と大切にしていること、悲嘆する家族に対する思いと関り

○横塚 美紀、中田 哲也、神馬 千登勢

獨協医科大学病院看護部

救命救急領域では、事故や慢性疾患の急性増悪により、短期間のうちに死のプロセスを辿る患者もいる。家族に一番近い存在で寄り添う看護師の役割は重要である。本研究では、A大学病院救命救急センターに勤務している看護師47名を対象に、悲嘆する家族に対する看護師の思いと関わり、エンゼルケアの実施状況と大切にしていることを明らかにすることを目的としている。

調査の結果、35名から回答を得ることができた。分析の結果、悲嘆する家族と関わる看護師の思いとして3つのカテゴリ、患者が亡くなり悲嘆する家族への関わり方として5つのカテゴリ、エンゼルケアを行う際に大切にしていることとして3つのカテゴリが抽出された。またコロナ禍でのエンゼルケアの現状としては、感染拡大防止による制限がある中で家族の希望に添えるように、感染対策を行い家族に寄り添いケアを行うことができていた。

悲嘆する家族と関わる際、家族の反応に合わせた対応が必要であり、エンゼルケアを行う際には、家族の思いが尊重できる関わりが大切である。

院内の混雑解消に向けた取り組み

○海老原 充生

獨協医科大学病院医事保険課

大学病院医事部門(入院課・外来課・医事保険課)では、新型コロナウイルス感染症予防対策として、パーティションの設置や入院受付窓口・退院会計窓口を分離するなど、物理的な間隔を設ける対策を実施し、一定の効果を得ました。

しかしながら、「他にも院内の混雑を解消する方法はないか?」という急務の課題が残りました。

今回は、特に混雑する会計窓口において、新たな決済方法である“医療費あと払いクレジットサービス”を導入することで、患者さんの院内滞在時間を減らし、結果として人流抑制の効果が得られた事例を紹介します。

また、他の運用改善と組み合わせることで、混雑解消と患者サービスの向上を併せて目指す取り組みを紹介します。

令和3年度 獨協医科大学教育セミナー 抄録集

2022（令和4）年2月9日

編集・発行 獨協医科大学SDセンター
〒321-0293 栃木県下都賀郡壬生町大字北小林 880
電話：0282-87-2494